

外国人人材に 頼らなければいけない 現状について

室蘭市医師会
三愛病院

ちばやすじ
千葉泰二



私の住む登別市は、全国的にも有名な温泉地であり、行動制限が緩和後、徐々に外国人観光客が訪れるようになった。その一方でホテルや旅館では、コロナ禍で離職した職員の補充が追いつかず、サービスの質の低下を招かないよう、収容人員を減らして運営している。医療・介護施設での人材不足も運営上の大きな課題であり、入院者や入居者を制限することもある。また最近の若い新入職員は、コロナ禍による対人交流の制限も影響してか、早々に職場不応となり退職したり、代行業者経由で退職するというケースも認められる。

室蘭・登別管内のハローワークによると、2023年5月現在の求人倍率は1.20であるが、人口減少は顕著で、働き先が観光業や製造業と多種にわたる地域でもあり、より一層医療・介護現場で働く職員の確保を困難にしている。国策として、1993年から外国人労働者の受け入れが始まり、2022年10月現在、技能実習約34.3万人、特定技能15.4万人、EPA約7.3万人、在留資格(介護)約6,900人などが働いており、登別市内には223人が生活している。

将来推計によると、2040年に約69万人の介護人材が不足すると予測されていて、当法人も2021年度から介護現場で外国人留学生の受け入れを始めた。現在15名のベトナム人(男性4人、女性11人)が働いており、経歴は高校卒が大半で、平均年齢25.8歳、介護の技術を取得したいとモチベーションが高い人材が多い。なかには契約期間満了後も在籍し、いずれ介護支援専門員や社会福祉士になりたいと考えている向上心のある留学生もいる。全国の外国人の受け入れ状況を国別にみると、2022年12月現在、ベトナム人約48.9万人、ネパール人約13.9万人、インドネシア人約9.8万人、ミャンマー人約4.7万人等の順である。ベトナムは親日派で、高齢者を敬う文化があり、介護分野で働く人材として適当と考えられた。受け入れにあたり、職員間のコミュニケーションを円滑に図るため、日本人職員が、ベトナムの文化・歴史・言語に触れるなどし、心理的な距離を近づけた。北ベトナムは中国やロシアが、南ベトナムはアメリカやフランスの支援を受け、南北が分断し、1955年～1975年までの約20年間ベトナム戦争が続いていた歴史がある。そのようなこともあり、純粋な共産主義とは違う、自由な感覚も持ち合わせている。

入職までの流れは、ベトナムの日本語学校で学び、

介護ビザを取得後入国し、更に国内の日本語学校で日本語能力N2～N3レベルとなり、介護専門学校(2年間)に入学する。卒業時は国家試験を受験し、合格に越したことはないが、不合格でも「みなし准介護福祉士」として勤務できる。現在までの合格者は11名(15名の内)で、敷地内にある女子寮や男子寮で集団生活を送っている。日本文化に慣れるとともに、個人の空間や時間を大切にし、個室がある住居への転居を希望することが多くなった。また適齢期でもあることから、結婚を希望することが多くなり、パートナーの動きによっては離職する可能性もあり、その対応に苦慮している。コロナ禍の約3年間、帰国の機会を与えることができなかったが、母国にいる親族との情報交換は、SNS(ビデオチャット)で埋め合わせできているようだ。現在日本語能力N1～N3レベルまで達している留学生がほとんどで、高齢者や職員との日常会話や、介護業務・介護記録で困ることは少なくなっているが、日本語特有の表現や言い回しに戸惑うことはある。

今後看護や介護の現場で人材不足が進み、管理運営が難しくなり、より一層外国人人材に頼らざるを得なくなるかと思われる。外国人人材の受け入れにあたり、日本の文化や慣習を一方向的に押し付けるのではなく、その国の文化や言語を理解することも、職員間の連携が円滑に進む手立てかと感じた。また高齢者に対する優しく献身的な姿勢は、日本人職員にとって見失いかけている一面でもあり、医療・介護施設の活性化につながっている。今後も様々な課題や問題に直面するかと思われるが、外国人人材と協働し、高齢者に安心・安全な環境を提供していきたい。

